

2022年11月27日主日礼拝

説教題「希望の『矢印』」ヨハネによる福音書 20 章 19～23 節

主任牧師 加藤 誠

**「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」(ヨハネ20章22-23節)。**

今朝の聖書箇所は主イエスの復活の場面を選ばせていただきました。クリスマスに向かう時にイースターの箇所は奇妙に思われるかもしれませんが、先々週、ルワンダで和解と平和の働きに仕えている佐々木和之さん・恵さんの報告を聞き、先週は野中宏樹牧師（鳥栖教会）のメッセージを受けて、改めて主イエスが私たちの間に生まれてくださった意味を思い巡らす中で、強くこの箇所を示されました。

主イエスが十字架で殺された後、弟子たちは主イエスと最後の晚餐を囲んだ部屋に集まっていました。エルサレムの町の中をウロウロしていたら「イエスの残党」として捕まる危険があり、安息日には遠出は禁じられていましたからエルサレムから逃げ出すこともできない。そのためガリラヤから出てきた彼らは他に行く場所がなかったのです。それでユダヤ人を恐れ、扉と窓のカギをすべて締めて暗い部屋に閉じこもっていた彼らの、その真ん中にご自身をあらわされた主イエスはこう語りかけました。「平和があるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わす」。そして息を吹きかけて言われたのです。「聖霊を受けよ」と。

扉や窓のカギをすべて締めた暗い部屋。それは弟子たちが生きていかなければならない世界をあらわしています。神の愛がひねりつぶされ、神の正義が捻じ曲げられる世界。噂話で簡単に扇動されてしまう無責任な群衆。名もない小さな人びとの言葉は無視され、嘘の証言が採用されて、腹黒い権力者たちの高笑いが響く世界。神の愛と正義を信じて生きていきたいと思っても、暗い部屋の中に閉じこもざるを得ない絶望的な世界。けれども、弟子たちが生きていかなければならないこの世界に、主イエスは「あなたがたに平和があるように」と平和を携えて来てくださいました。「どんなにこの世界の暗闇が深く見えても大丈夫、わたしが共にいる。神さまの平和と安らぎを受け取りなさい」と。そして、十字架で深く傷つけられた身体を通して息を吹きかけられるのです。「聖霊を受けよ／神さまの息吹を受けよ」と。私たちは息をしないと生きていけないのに、この世界の空気はあまりにも汚れていて、どう息をすればよいのか分からなくなっている私たちに、主イエスは「神さまが吹き入れてくださる息吹を吸い込んで生きなさい」と言われるのです。

そして主イエスは彼らに大切な使命を与えられます。「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わす」。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、その罪は残る」。わたしはずっと、この言葉はキツイ言葉だなあと感じてきました。わたしたちがだれ

かを赦せば、その罪は赦され、赦さなければ、その罪は残る」なんて言われても困る。赦すのは難しい、責任が重すぎると。けれども今回、佐々木和之さんのメッセージで、主イエスは弟子たちに「赦さなければならない！」と無理強いしていないことに気づかされました。大切な主イエスを理不尽で残酷な仕方て殺された現実には深く傷つき、打ちのめされていた弟子たちが、主イエスを殺した人たちを「赦す」ことに立ち上がっていく困難さを主はよくご存知であり、だから「聖霊を受けよ」と言われたのです。「人が人を赦すことは難しい。人の罪のどす黒さをまざまざと見せつけられる中で、その人を赦すことは不可能かもしれない。だから聖霊を受けなさい。神の愛の息吹を受け取り、吸い込んでいきなさい。神の愛がなければ、私たちは何もできないのだ。だから聖霊を求めていこう。赦しは義務ではない。赦しは、私たちが聖霊の働きを求める時に、神の恵みとして与えられていく、その恵みを祈り求めていこう」と、語りかけてくださったのではないかと思います。

佐々木恵さんは、28年前の大虐殺で生き残った被害者と、その加害者の家族が寄り添い、一緒に歩む「ウムチョ・ニャンザ」の働きを通して、フランソワーズさんという一人の女性が主イエスの癒しにあずかり、新しい命を歩み始めている証しを紹介くださいました。28年前の大虐殺は彼女の心と体を深く傷つけ、引き裂き、彼女は自らの内に沸き起こる怒りと憎しみに彼女自身が長い間苦しめられ、周囲への暴力となって表出したため、村の人々は彼女を「サタン」と呼んだほどだそうです。彼女は何も悪くないのに、大虐殺を引き起こした人間のどす黒い罪が彼女を「狂わせた」のでした。けれども、今から約十年前に佐々木さんたちの和解と癒しのプログラムに半信半疑で参加し、「ウムチョ・ニャンザ」という被害者と加害者家族の女性たちが一緒に働く工房で少しずつ心の重荷が癒されていく中で、彼女の心と体を二十数年間苦しめ続けてきた過酷な重荷から解放されていったのでした。彼女はこう語っています。「ズタズタに引き裂かれたわたしの心を、十字架の主が癒してくださり、さらに主イエスを信じる人々の誠実な行動がわたしを癒しに導いてくれました。それまで誰にも話せずに、一人苦しんできた辛い過去を、わたしは手放すことができたのです。今、主に癒しを受け取った者は、ほかの誰かの癒しのために働くことができるという恵みに感謝しています」と。

主イエスから聖霊を受け取ったなら「ただちに」赦しの奇跡が起こるわけではありません。フランソワーズさんの場合「二十数年」かかって癒しと赦しが起こされたのですが、そこにはどんなに人間の罪が深くても「諦めることなく」十字架の主の愛と赦しを注ぎ続ける聖霊の働きがあったからです。十字架の主はどんなに人間の罪の深さに絶望した世界においても復活の命をあらわしてくださり、私たちに聖霊を注いでくださる方なのです。ここにクリスマスに私たちに与えられている希望の「矢印」が確かに示されています。この矢印に向かって歩いていきたいのです。